

ミニデイ【おとこの台所 桜新町だより】

発行責任者 桜新町広報：柏木君夫、岡元正史

◎ 水木しげる。生誕100周年。

今年、鳥取県境港で育った妖怪漫画家・水木しげる（本名・武良茂（むら・しげる）1922年～2015年）の生誕100周年だ。

これを記念して、「水木しげるの妖怪 百鬼夜行展」が開かれて、水木の妖怪画の原画100点以上が公開された。

水木が子供の頃、武良家に手伝いに来ていた「のんのんばあ」という老婆がいて、「お化け」や「妖怪」の話をよく聞かせてくれた。「のんのん」とは、鳥取の言葉で、神仏に仕える人のことだ。

水木は「のんのんばあ」のおかげで、妖怪話にワクワクとして、興味を持ったと語っている。

「遠野物語」で知られる柳田國男の著書「妖怪談義」を水木は熟読する。「妖怪談義」はイラストがなく文章だけの書で、水木は自分の想像力で妖怪画を描いていく。のちに895種の妖怪などを著書「日本妖怪大全 妖怪・あの世・神様」にまとめた。

◎ 「ゲゲゲの鬼太郎」。

水木は幼少時代、自分の名前の「しげる」が上手く発音できず「げげる」と言っていた。付いた水木のあだ名が「ゲゲ」。

漫画本「墓場鬼太郎」をアニメ化するとき、題名を「ゲゲゲの鬼太郎」とした。

◎ 疫病を祓う、妖怪「アマビエ」（予言獣）。

コロナ禍の昨今。疫病から守ってくれる妖怪「アマビエ」が大きな話題となった。

「アマビエ」の始まりは、170余年前の江戸時代。

肥後（熊本県）の海に毎夜、光る妖怪が出た。

「疫病が流行るので、自分の姿を書き写して人々に広めよ。そうすれば難を避けられる」と「アマビエ」が予言した。もとは「アマビコ」（阿摩比古／尼彦）と言われていたが、書き写すときに「コ」を「エ」と書き間違えたともいわれる。

団扇（うちわ）業者は、夏が稼ぎどき。コロナ禍で各地の夏祭りの需要が激減したときに、そのピンチを「アマビエ」の姿を描いた団扇が大売れして救ってくれた。八百万（やおよろず）の神を祀る日本。自然を畏敬し、水難などに注意して、夜は出歩くなと、子供らに注意を促す妖怪が多く、人に悪さする妖怪は少ないようだ。



9月の定例会 参加者は1日（木）13名、9日（金）14名でした。

10月の定例会 6日（木）、14日（金）。至誠会の実習生が参加されます。